

お茶うけ 第20話

ブルガリア・ヨーグルト

朝日新聞日曜版のブルガリアのヨーグルトの記事(1997年2月9日)を読んで、私は20年以上前のソフィアのホテルを懐かしく思い出していました。ラズロフの町のコンデフさんが、若い頃に蜂蜜を混ぜた特製のヨーグルトを革袋に入れて、約200Kmも離れたソフィアまで歩き通したという記事には、自身の体験を再確認する気分になりました。

1975年の夏、私はブルガリアの首都ソフィアの中心部のホテルに1ヵ月近く滞在していました。食べ物に好き嫌いが無い私も、毎日肉類が中心のホテルの食事が続いたためか、1週間も経つとお腹が不調を訴えました。ソフィアは内陸の高位盆地(海拔550m)にあり、黒海に面した港町ブルガスから約500Kmも離れていて、魚は手に入りにくいようでした。メニューに魚料理を見つけて注文しても、返事は決まって「ノウ」でした。日本にいれば、お粥かさっぱりした食事ですぐ治るところですが、外国のホテル住まいではそれもできません。

困って、現地に滞在していた友人に相談しますと、ヨーグルトが良いと薦めます。お昼にホテルのレストランで「ヨーグルト」を注文しますと、大きな深皿にタップリ盛ったヨーグルトと小さめのコップ一杯の蜂蜜が、私の前に置かれました。隣の席で友人は、蜂蜜をヨーグルトに混ぜて食べることを教えてくれました。生まれて初めてのヨーグルトだけの食事でしたが、大変美味しく、栄養満点で、午後の仕事もしっかりできました。気が付くと、お腹も復調していました。

それからは、週に1回か2回のお昼の「ヨーグルト」で、体調を整え仕事を進めて、長期出張を無事終えることができました。

この体験は、私に「ヨーグルトは優れた栄養・整腸剤」という信念を植え付けることになり、今でも体が疲れた時は「ヨーグルト」、しかもプレーンな「ブルガリア・ヨーグルト」に蜂蜜を沢山混ぜて摂ることにしています。

『ブルガリア駐在記』という本によれば、日本での「ブルガリア・ヨーグルト」のお目見えは、1970年の大阪万国博覧会のブルガリア館で、明治乳業が紹介した時とのことです。

昭和天皇・皇后両陛下がブルガリア館をご訪問された時、ディーチェフ駐日大使が「ブルガリア・ヨーグルト」で作ったアイランという飲み物をさしあげたところ、両陛下はお気に召されてお替わりを所望されたほどでした。また、両陛下からこの話をお聞きになった、当時の皇太子殿下と美智子妃殿下も、数日後のブルガリア館ご訪問の際に、アイランを召し上がられたということです。

やがて、明治乳業はライセンス契約を結び、ブルガリアからヨーグルト菌を輸入して自社で乳酸菌を培養し、日本国内で「ブルガリア・ヨーグルト」のブランドで販売を開始いたしました。

(『ブルガリア駐在記 - 外交官の体験と回想 -』前・駐ブルガリア大使 田島高志著 恒文社刊)

ブルガリアは、私がかもう一度訪問したい国です。そして今度はプライベートの旅で、本場の「ヨーグルト」をゆっくり味わいたいと思います。

以上

